

ハンス・メムリンク 《ジャン・ド・セリエの二連板》

—聖ゲオルギウス弩手組合と騎士道—

山形 美有紀（京都大学）

15世紀ブルッへの巨匠メムリンクは、出身地ドイツの造形語彙を吸収し、初期ネーデルラント絵画の新様式に同化させた。《ジャン・ド・セリエの二連板》（1487-92年、ルーヴル美術館）はその好例であり、写本さながらの小画面に、甘美で典雅な趣を湛えている。左翼の「聖女に囲まれた聖母子」に関しては、従来のネーデルラント起源説と新たなドイツ起源説があり、本発表では後者の立場から図像伝播のプロセスを紐解く。この図像は元来、女性に貞節の規範を示すために利用された。しかし本作の場合、聖女の集団を前に、世俗男性ジャン・ド・セリエが単身で跪く姿は、ジェンダー論的な矛盾を呈する。右翼の背景をなす「福音書記者聖ヨハネの黙示録」「聖ゲオルギウスの竜退治」の物語場面に関しても、その不可解な図像選択の理由は等閑に付されてきた。ところが近年、歴史学者クロンビが精査したブルッへの聖ゲオルギウス弩手組合の名簿から、ジャン・ド・セリエの名が発見された。そこで本発表は、彼が香草や薬草の商取引を営む傍ら、弩の武芸を嗜んだことに着眼し、彼の職業と騎士道趣味の両観点から、独自の作品解釈を提起する。

まず、画中に描き込まれた植物を同定し、当時の本草学の隆盛や注文主の職業アイデンティティとの関連を新たに指摘する。聖女が集う「閉ざされた園」は、『雅歌』に言及された香草や薬草を想起させる点で、注文主の職業柄を斟酌した図像選択だった。

メムリンクは、聖カタリナに加えて聖アグネスや福音書記者聖ヨハネまでもが花嫁神秘主義に結び付くことに鑑み、これらの聖人を図像プログラムに採用した。右翼上部に漂う「黙示録の女」は、左翼に体现された「無原罪のお宿り」思想を補完し、両翼に有機的連関を作り出す。

他方、聖ゲオルギウスの描写は、ジャン・ド・セリエが聖ゲオルギウス弩手組合に属したことを表す。彼は弩手組合での社交活動を通じて、組合長に就任した宮廷の重臣ロードウェイク・ファン・フルトフースと姻戚を結び、立身出世を遂げた。伝統的に写本風の小型板絵は、王侯貴族のステイタス・シンボルとされた。《ジャン・ド・セリエの二連板》の精緻な様式は、この種の洗練されたアイテムが市民階級にまで普及したことの証左であり、写本収集家ロードウェイクとの絆を示す手段でもあった。

ネーデルラント各地の射手組合・弩手組合・修辭愛好家団体に属する市民は、貴族趣味の模倣による社会的地位の上昇を図り、「愛の園」や聖女を描いた絵画を所有した。本作は、これら共同体への帰属意識を投影した早期の例に位置付けられる。「聖女に囲まれた聖母子」は、写本やタピスリーに頻出する世俗的な「愛の園」や「騎士道愛」を、祈念用二連板に転用するのに恰好の画題だった。以上の考察からメムリンクは、注文主ジャン・ド・セリエが理想に掲げた、高貴なる騎士道の実践者としての自己表象を、絵筆で巧みに実現したと結論する。